

11月に入りました。このところ、私たちは毎週の福音書に、ぶどう園へ息子を働きに行かせる話とか、ぶどう園を任された農夫、王子の婚宴のたとえ、また皇帝への税金などなど、イエス様がユダヤ教の指導者である律法学者やファリサイ派たちと論争している話を読んできました。これらは、マタイの福音書では、イエス様がロバに乗ってエルサレムの都に入ってから起こった出来事として、描かれています。

イエス様は日曜日にエルサレムに入ると、月曜日には神殿の庭で両替や鳩を売る商人たちを追い出して大暴れをしました。宮清めの月曜日ですね。そして翌日は論争の火曜日ということになっています。

この火曜日の論争は、ファリサイ派に対してイエス様が「メシアはだれの子か」という質問をして、彼らが「ダビデの子です」と答えたのに対して「いや、ダビデはメシアを主、ご主人様と呼んでいるではないか」と答えたことで終わってしまいます。

イエス様が日曜日にロバに乗ってエルサレムに入られた時、大勢の群衆が「ダビデの子にホサナ」と言ったので、みんなはイエス様のことを「メシアではないか」と期待していたのです。そのイエス様が、「メシアはだれの子か」という質問をして、ファリサイ派が「ダビデの子です」と言ったことに対して、「うん、そうだ」と言えば問題がなかったのです。ところがイエス様は「ダビデのご主人様だ」というダビデの詩編、110編を引用し、自分はダビデが敬う、神様の右の座に就く者、神の子だ、と答えたのでした。

イエス様をご自分を神と同等の存在と主張したので、ファリサイ派は呆れて、去って行ったのです。そしてこのことが、イエス様の逮捕の原因の一つになったと思われまます。

この一連の論争が終わって、イエス様は、群衆や弟子たちに向かって、今まで論争していた律法学者やファリサイ派のことを痛烈に批判されたのが今日の箇所です。今日の箇所が続く部分では、「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。」という言い方を何回も繰り返すのです。

ここでは、イエス様は「あなたたちは間違っている」と批判する、と言うよりは、「あなたたちはダメだねえ」と嘆いて、「あなたたちは不幸だ」と言われているのです。どうして不幸なのか、今日の聖書の箇所から考えてみましょう。

今日の福音書で、イエス様が律法学者やファリサイ派を批判されているのは、前半は、「彼らは言うだけで実行しない」という問題でした。ユダヤ教の律法について、立派なことは言うけれど、それに行動が伴っていない、という点でした。それはちょうど、「ぶどう園へ行って働きなさい」と言われて、「お父さん、承知しました。」と答えながら行かなかった弟のようなものでしょう。彼らは「モーセの座」に着いている、ということで、律法を教える立場にある、ということです。「モーセの座」というのは、聖書の中でここにしか出てこないのですが、どうも当時のユダヤ教の会堂では、会衆に対峙して、モーセの座がエルサレムに近い側の壁に置かれて、律法を解釈する立場の人の特別の座席だったようです。

彼らはモーセの座に座っているから、言うことは立派なので聞きなさい。しかし、彼らは言うだけで、その行動は真似をしてはいけない、とイエス様は群衆や弟子たちに警告されました。

「彼らは言うだけで実行しない」とイエス様は言われましたが、5節からは、少しイエス様の主張が変わります。彼らは実行しない、とは言っておられません。『そのすることは、すべて人に見せるためである。』と言っています。行動はするが、動機がおかしい、彼らは偽善者だ、というわけです。

「聖句の入った小箱を大きくしたり、衣服の房を長くしたりする。」という言葉について説明が必要でしょう。「聖句の小箱」というのは、出エジプト記13章の初子の奉獻や除酵祭という酵母菌を入れないパンの規定や、申命記6章の神様はひとりであり神様を愛することの大切さなどの言葉が入った箱のことです。ユダヤ人たちは祈る時、自分の額や右腕にそれを付けるのですが、彼らはそれを大きくする。また「衣服の房」とは、元々は上着に付けた紐のようなもので、民数記の15章に書かれています。それを見る時に、神様の命令を思い出すように、という目的です。これを彼らは長くする、というのです。本来は自分の心に律法を刻むためでしたが、彼らはそれを人々に見せるために、大きくしたり、長くしたりするというわけです。

そして、もっとハッキリ言われているのは、『宴会では上座、会堂では上席に座ることを好み、また、広場で挨拶されたり、『先生』と呼ばれたりすることを好む』ということです。この『好む』という言葉は『愛する』という意味を含んでいます。本当は神様を『愛する』ために使うはずの小箱や房を、人々から尊敬されるために使って、人々にそうされることを『好む』『愛する』ということでしょう。

神様を愛するのではなく、自分が可愛くて、人々から尊敬される生活を愛してしまっている。これが、律法学者やファリサイ派の『ダメなところ。不幸なところだ』とイエス様は嘆いておられる、ということなのでしょう。人々から持ち上げられて有頂天になり、『先生』『父』『教師』と呼ばれて、人々を見下げるような者になってゆくことを、イエス様は不幸だと言われるのです。そして、『あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。』という結論になってゆくのです。

宗教的指導者というのは、率先垂範してイエス様のように生きる人でなければなりません。人々の重荷を担い、共に歩む覚悟が必要です。人に重荷を担わせておいて、自分是指一本触れようとしない指導者は、指導者失格です。そのためでしょうか、ローマ教皇の正式な勅書などには「神のしもべのしもべ」という称号が使われるくらいです。このイエス様の「仕える者になりなさい。」とは、指導者には大切な言葉なのです。

そのためにはどうしたらいいか、今日、私は中国の有名な本を紹介しようと思います。

これは7世紀に中国が唐と呼ばれる国になった頃、2代目の皇帝・李世民（リ・セイミン）が、部下たちと交わした会話の記録で、『貞観政要（じょうがんせいよう）』と呼ばれている、全10巻40篇にも及ぶ書物です。これを全部読むことは、時間的にも経済的にも難しいですが、これらを要約したものが今までに多く翻訳されて、古くは鎌倉幕府の北条政子から徳川家康、そして明治天皇などのリーダーがそれから学び、最近では、山本七平という思想家や、たくさんの本を書いている、ライフネット生命保険会長の出口治明という人が新聞で紹介したり、自分自身も解説書を書いています。

私は、今日は出口さんの解説書の最初の所だけ紹介します。出口さんは、この本に出てくる偉大な唐の国の2代目皇帝、李世民の素晴らしい理由がふたつある、と書いています。

ひとつは、「権限の感覚」を持っていたこと、だそうです。

自分の部下である臣下にいったん権限を与えたら、その権限は臣下のもので、皇帝といえども口出しすることができない。それが仕事を任せるときのルールだということ。それがいやなら、その部下を更迭すればいい。それをせずに口出しすれば、「組織」が「個人商店」になってしまう。

皇帝は絶対的な権力を持っていますが、「ここから、ここまでは、自分で決めていい」と権限を与えて部下に仕事を任せただのなら、たとえ皇帝であっても、部下の決定に従わなければならない。

皇帝が自分勝手に権力を行使すれば、人民や臣下を疲弊させ、やがて裸の王様になってしまう。この皇帝、李世民にはそのことがよく分かっていたのです。

高い地位についた人間が、裸の王様になれば、君主の一言一句に組織は振り回されるようになり、同質化してしまい、同質化した組織は、やがて時代の変化から取り残されてしまう、というわけです。

もう一つの素晴らしい点は、

臣下の「諫言（かんげん）」を得たことです。「諫言」という言葉の説明が必要でしょう。辞書を引くと『目上の人を非をいさめること。また、その言葉。』と書かれていました。諫言とは、上司の過失を遠慮なく指摘して忠告することです。

この皇帝は、諫言する部下を積極的に登用していました。貞観政要に出てくる側近は、皇帝を数えきれないほど諫めています。自分を殺そうとした人物さえ、その能力を認め、側近として任用しています。臣下の忌憚のない諫言を聞き入れることで、裸の王様にならないように努めたわけです。この皇帝李世民は、臣下の諫言を積極的に受け入れ、彼らの批判に耐えることで、自らを鍛え上げていきました。皇帝であっても、決して全能ではないことをわきまえた姿勢。欠点や過失を指摘されることを望み、喜んで聞き入れた姿勢が、この本には随所に見られる、というのです。

このようにして、皇帝・李世民は、臣下に権限を委譲することにより、また、臣下の声を喜んできくことにより、本当の民意を汲み取り、自身の判断ミスを防ぎ、統治に生かし、国民に仕える皇帝として、軍事力、農業生産力、社会基盤（運河や交通網）、芸術などを発展させ、中国史上類を見ない輝かしい国家の繁栄と太平の世を実現しました。

『あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。』というイエス様の教えは、7世紀の中国の皇帝の生きざまに通じており、日本の指導者たちの内にも引き継がれたということだろうと思います。

この教えを素直に受け入れられない指導者がいたなら、それは自分を偉そうに見せたい人になってしまっているということではないでしょうか。そんな人に対しても、イエス様は、「あなたたちはダメだねえ」と嘆いて、「あなたたちは不幸だ」と言われているのではないのでしょうか。

イエス様の教えを具体的に実行する上で、参考になれば、と思い、紹介いたしました。